

岩手県高等学校体育連盟

一戸町におけるなぎなたの取り組みについて
～運動部活動と地域スポーツの連携～

< なぎなた専門部 >

岩手県高等学校体育連盟なぎなた専門部

一戸高等学校 教諭 細川 都也子

1 はじめに

令和3年3月に行われた第16回全国高等学校なぎなた選抜大会において、男子個人試合で本県の選手が第1位と第2位に輝くという快挙を成し遂げた。第1位の選手は、幼少期からの経験者ではあったが、彼が現在通う高校には、なぎなた部がない。週に2回程度、一戸町なぎなた協会の練習に参加、もしくは一戸高校なぎなた部の生徒と練習を行っているのみである。

昨今、加速度的に進展する少子化傾向や、部活動指導が教員の長時間労働の一因として問題視されるなど、これからの部活動の在り方そのものに対し、社会全体が注視している。そして、運動部活動を地域や民間団体の運営に移行することなどが検討されている。

そこで、部活動と地域スポーツとの連携をどのようにはかっていくべきか、一戸町のなぎなたの取り組みから考察してみたい。

2 岩手県のなぎなたのあゆみ

それまで各地区の協会、スポーツ少年団でなぎなたの活動は行われてきたが、平成11年の岩手インターハイを契機に、盛岡第二高校、釜石商業（現：釜石商工）高校、盛岡女子（現：盛岡誠桜）高校になぎなた部もしくは愛好会が設置されたことで（表1参照）、高校の競技人口が飛躍的に増えた。部の発足とともに行われた強化策も実り、インターハイでは、盛岡第二高校が演技競技で第5位に入賞する成果をあげた。その後、岩手インターハイ世代が教員として採用され、各高校に専門の指導者が配置されることで、高校なぎなたは県内での地歩を固めることができた。

一方で、スポーツ少年団で活動を行ってきた子供たちは、中学校に部が無いと、別の部に入部せざるを得ないことから、なぎなたを継続できなくなるケースも多く、高校のなぎなた部は、ほぼ全員が高校から競技を始めるという実態が長く続いていた。

表1【団体組織の設置】

年 度	スポ少・一般	中学校	高 校
昭和62年	滝沢なぎなたスポーツ少年団		
昭和63年	みたけなぎなたスポーツ少年団		
平成5年	やまびこなぎなたスポーツ少年団		
平成6年	盛岡市なぎなた協会		
平成7年			盛岡第二高校なぎなた部
平成8年	釜石なぎなた同好会		釜石商業高校なぎなた部
平成10年	紫波なぎなたクラブ		盛岡女子高校なぎなた愛好会
平成22年	一戸町なぎなた協会		一戸高校なぎなた部
平成23年		一戸中学校なぎなた部 奥中山中学校なぎなた部	

3 一戸町のなぎなたの取り組みについて

(1) きっかけ

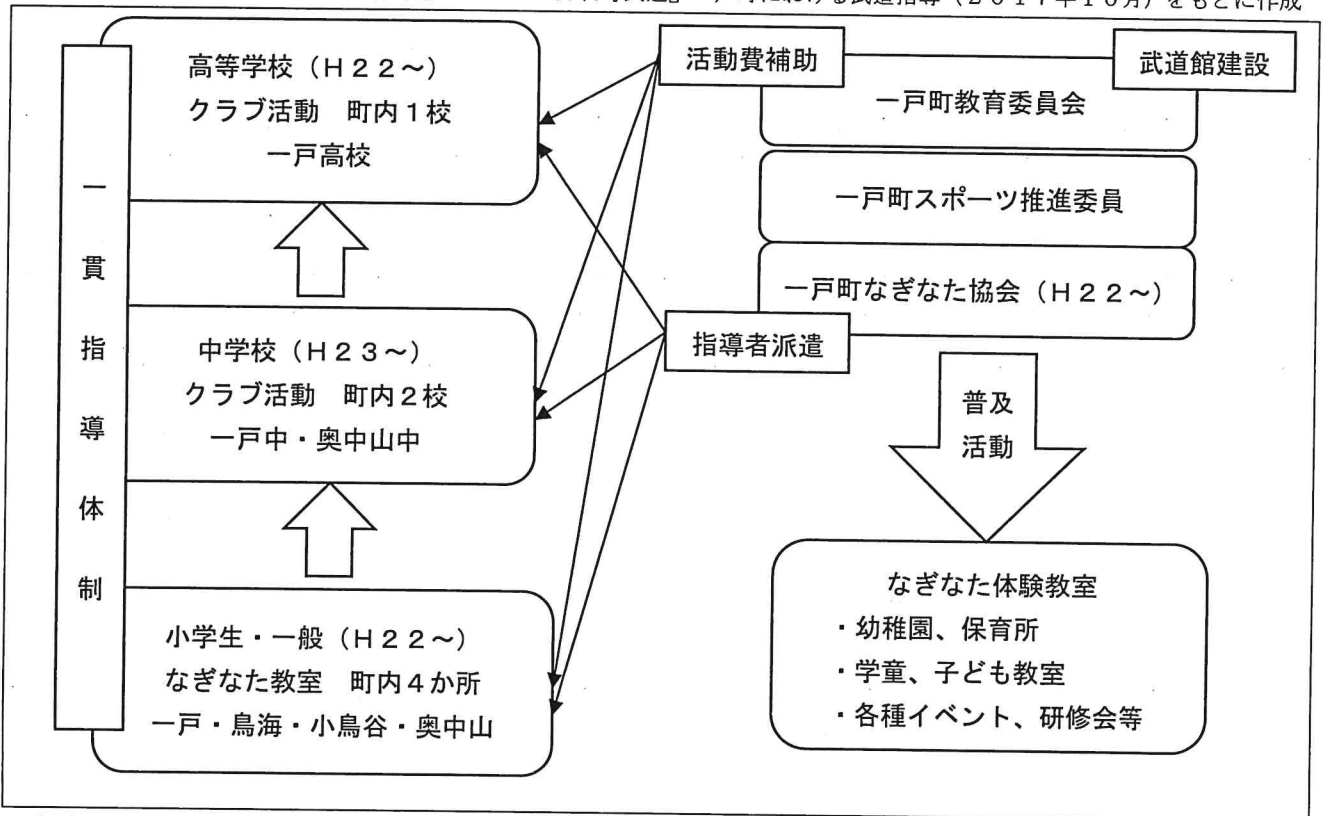
一戸町のなぎなたの始まりは、平成28年に岩手県で国体が開催されるにあたり、一戸町において歴史的にも関わりが深かったなぎなたを「町技と位置付け人間形成に生かしつつ、町の活性化にも繋げたい」との理由から、なぎなた競技の開催地として立候補し、選定されたことによる。

それまで、競技者のいなかった一戸町になぎなたを普及させることと、国体で活躍する選手を地元から輩出することを目指し、普及と育成は同時に進められ、取り組みが本格化したのは平成21年からであった。

それから現在に至るまで、様々な試行錯誤を繰り返し、現在のような普及体制と一貫指導体制を確立させていった。(図1参照)

図1【一戸町のなぎなた活動体制】

月刊『武道』一戸町における武道指導(2017年10月)をもとに作成



(2) 全国大会での実績(表2、表3参照)

表2【一戸町中学生の全国大会上位入賞の成績】

年度	大会名	種目	結果	備考
平成29年	JOC全国中学生大会(岩手県)	試合男子の部	第2位	選手A
	全日本少年武道錬成大会(東京都)	試合中2の部	第2位	選手B
		試合男子の部	第3位	選手A・C
平成30年	JOC全国中学生大会(愛媛県)	個人男子の部	第1位	選手A
		演技競技	第5位	選手A・B
	全日本少年武道錬成大会(東京都)	試合中3の部	第3位	選手B
試合男子の部		第1位	選手A	
令和元年	JOC全国中学生大会(福井県)	男子個人試合	第3位	選手A
	全日本少年武道錬成大会(東京都)	男子個人試合	第1位・第2位	選手A・D
		試合中3の部	第3位	選手E
令和3年度	JOC全国中学生大会(鹿児島県)	試合男子の部	第1位	選手F
		試合女子の部	第5位	選手G

表3【一戸町高校生の全国大会上位入賞の成績】

年度	大会名	種目	結果	備考
平成27年	全国高等学校総合体育大会(大阪府)	演技競技	第3位	選手H・I
	国民体育大会(和歌山県)	演技競技	第5位	選手J
平成28年	全国高等学校総合体育大会(山口県)	演技競技	第3位	選手H・I

平成28年	国民体育大会（岩手県）	演技競技	第1位	選手H・J
		団体試合	第7位	選手H・J
平成29年	全国高等学校総合体育大会（宮城県）	演技競技	第2位	選手H・K
	国民体育大会（愛媛県）	演技競技	第2位	選手H
令和元年	国民体育大会（茨城県）	演技競技	第4位	選手L・M
令和2年度	全国高等学校選抜大会（兵庫県）	団体試合	第3位	選手B・E・N
		男子個人試合	第1位・第2位	選手A・O



平成28年岩手国体 少年女子の部で試合競技と演技競技を行う一戸町の選手

令和2年度全国高校選抜

1位・2位に入賞した一戸町の選手

(3) 特色

①一貫指導体制の確立

平成21年から、町内中学校（一戸中学校・奥中山中学校）において、体育の授業でなぎなたに取り組んでいたが、一貫した指導体制構築のために、平成22年には、一戸高校になぎなた同好会、平成23年には前述の中学校になぎなた部が創設され、継続して競技を続けられる環境が整備された。

高校進学後も競技を続ける選手が増加し、全国大会で上位入賞するという成果を収められるようになった。表3の選手Jは、中学校になぎなた部を創設した初代の部員であり、一貫した指導を受け、平成28年に行われた岩手国体において、悲願の優勝を果たした。男子競技者の活躍も目覚しく、これらはまさに、小学校もしくは中学校からの継続した指導の成果であるといえる。中学校になぎなた部がある学校は、全国的に見ても少なく、なぎなた競技は全国中体連に未加盟という状況下で、町内の中学校になぎなた部を創設したことは、一貫した指導体制において大きな意義がある。

②一戸高校なぎなた部と一戸町なぎなた協会の関わり

一戸高校なぎなた部員は、全員一戸町なぎなた協会の会員でもあるので、両方で活動できるという利点をいかし、広範な活動を行ってきた。

ア. 普及活動

例年、一戸町なぎなた協会の指導者が、幼稚園、保育所、学童クラブ等でなぎなた体験を行うなどの、普及活動を行っている。夏休み期間中は、中高生が、学童の子供たちになぎなたを指導する。中高生のお兄さん、お姉さんがやさしく教えてくれるので、子どもたちになぎなたの楽しさを印象づけることができる。

『岩手日報 R3年8月21日（金）』

先輩に教わる町技なぎなた 児童ら体験

一戸町教委は7月29日から11日まで、町内の学童クラブや放課後子ども教室6カ所で夏休みなぎなた体験教室を開き、子どもたちが町技として盛んななぎなたの魅力を感じた。最終日の11日は一戸学童クラブの43人が一戸小体育館で体験。児童は町なぎなた協会員や一戸中、一戸高なぎなた部のメンバーら12人から

なぎなたの持ち方や足の動かし方などを教えてもらい、1時間練習した。一戸小4年の田村結さんは「すねを打つところが楽しかった。高校生のお兄さんに『うまい』と褒められてうれしかった」と喜んだ。講師を務めた一戸高2年の山火教平さんは「初めてなのに、子どもたちはすぐ動けるようになって上手だった」と温かく見守った。



高校生らになぎなたの手ほどきを教ける子どもたち

イ. 合同練習

毎週土曜日の午前中は一戸町武道場「土道館」で合同練習を行っている。多世代が同じ活動の機会を持ち、お互いに教え合い、学びあうという目的だけでなく、先輩みたいになりたいと刺激を受け、子どもたちが継続して競技を続ける動機づけにもなってきたと考える。

【アンケート：現在の高校1～3年生の競技者11名による回答】

質問：あなたは、なぜ高校入学後もなぎなたを継続しようと思いましたが？理由を3つ述べてください。

回答：・負けたままで終わるのが嫌だったから。 ・小学校から続けてきたから。
・S君とY君がいたから。 ・中学生の時は勝てなかったのに、高校で勝たれたから。
・先輩方がいい人たちだったから。 ・今までなぎなたをやっていて楽しかったから。
・もっとうまくなりたと思ったから。 ・自分の成長につながると思ったから。
・姉を超えたかったから。 ・なぎなたをやめづらかったから。
・先輩に勧誘されたから。 ・大会でいい成績をとりたかったから。
・先輩と一緒に部活動がしたかったから。 ・男子と一緒に練習できるから。
・一戸高校に入学したから。 ・高校の部に知っている先輩がいたから。
・他にやりたい部活がなかったから。 ・中学校時代の友人に誘われたから。
・中学校で指導していただいた先生に、また会いたかったから。
・中学校の時、高校生の練習を見て、自分もレベルの高い練習をしたかったから。

ウ. 世代間の交流

年に2回、一戸町主催のなぎなた大会が開催されている。小学生から高校生までが出場し、学年、性別を基礎としたカテゴリーごとの種目に加え、今年は「交流演技の部」を設け、全学年混合の演技競技を行った。

エ. 指導体制の柔軟性

部活動は学校の管理下で行われるものであるが、高校の指導顧問が不在の場合は、副顧問の立ち合いのもと、一戸町なぎなた協会の指導者や成年選手が指導にあたることができる。先に述べた、全国選抜大会で1位を収めた選手が、一戸高校なぎなた部の練習に参加できるのは、一戸高校の指導顧問が一戸町なぎなた協会にも所属していることによる。これにより、選手はなぎなた協会員として参加が可能になる。また、一戸町の補助金を受けているので、中・高合同で県外遠征に出かけることも可能となる。



令和3年10月に行われた一戸町秋季大会
小学生と高校生がペアを組んで演技を行った。

4 岩手県のなぎなたの方向性

(1) スポーツ庁における部活動の地域移行に関する動き

①「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」(平成30年3月)

生徒にとって望ましいスポーツ環境を構築する観点から、学校や学校の設置者、地方公共団体、スポーツ団体が取り組むべき内容(環境・体制整備、休養日の設置など)が示されている。地域との連携においては、「学校と地域が協働・融合した形での地域におけるスポーツ環境整備を進める」ことを掲げ、今後の運動部活動の外部化を目指していることが読み取れる。

②「学校の働き方改革を踏まえた部活動改革」(令和2年9月)

平成31年1月の学校の働き方改革に関する中教審答申等を踏まえ、生徒にとって望ましい部活動の環境構築と学校の働き方改革も考慮した更なる部活動改革の推進を目指し、その第一歩として、学校と地域

が協働・融合した部活動の具体的な実現方策とスケジュールを示している。「休日の部活動の段階的な地域移行として、休日の部活動指導などは、地域人材が担うこととし、令和5年度以降、段階的に実施する」ことを掲げている。

③「運動部活動の地域移行に関する検討会議」(令和3年10月～)

運動部活動の地域への移行を着実に実施するとともに、子供たちがそれぞれに適した環境でスポーツに親しめる社会を構築することを目的として、有識者や自治体、スポーツ関係者等を委員とする検討会議が設置された。今後、運動部活動の地域における受け皿の整備方策等について議論し、提言を取りまとめる予定(令和4年7月)となっている。

- 検討事項 ア. 地域における受け皿の整備方策 イ. 指導者の質及び量の確保方策
ウ. 運動施設の確保方策 エ. 大会の在り方 オ. 費用負担の在り方

(2) 一戸町の事例に見る利点

①一戸町なぎなた協会の主導

一戸町なぎなた協会の練習予定表は、中・高の予定も記載され、全員に配布、送信される。一戸町なぎなた協会の指導者が、中・高の練習予定や行事を把握し、一戸町の大会や練習予定を組む。

②地域で育てる

学校ではできない活動ができ、地域のなかでの連帯、関係性が向上する。また、さまざまな価値観をもつ人との交流のなかで成長でき、なぎなた以外のことでも連携しやすい。地域の方々への感謝、地元を愛する気持ちも生まれ、岩手国体で活躍した先ほどの選手Jは、大学卒業後一戸町で就職し、現在なぎなたの指導に携わっている。

③さまざまな指導が受けられる

部活動のみであれば指導者は限られるが、週に一度の合同練習や平日の協会練習に参加するので、一戸町なぎなた協会の指導者、もしくは成年選手からいつでも指導が受けられる。部の顧問が気づかない部分を、他の指導者が気づき指摘してもらえるので、技術力の向上だけでなく、指導者の指導力の向上にもつながっている。

一戸町なぎなた協会委員 名位
一戸町教委・小島谷教委・真中山教委・小嶋の橋
練習予定 2021
11月 NOVEMBER

月	火	水	木	金	土	日
1 中・高小 16:00-17:30 (中山ホール) 中・高練習 18:30		3 文化の日 Colors Day 全て休み	4 真小の練習 16:00- 中・高小 18:00- 中・高練習 18:30	5	6 2021年度 選手と指導 者 4年度以上 指導者 9:00- 12:00	
8 中・高小 16:00-17:30 (中山ホール) 中・高練習 18:30	9	10 中・高小 16:00-17:30 (中山ホール) 中・高練習 18:30	11 真小の練習 16:00- 中・高小 18:00- 中・高練習 18:30	12 真小なぎなた クラブ	13 真小なぎなた クラブ 中・高練習一 戸町で 合同練習あり	14
15 中・高小 16:00-17:30 (中山ホール) 中・高練習 18:30	16	17 中・高小 会館前練習 全て休み	18 真小の練習 16:00- 中・高小 18:00- 中・高練習 18:30	19 真小なぎなた クラブ	20 5年度以上 指導者 9:00- 12:00	21 真小練習 真小 in 真小
22 中・高小 16:00-17:30 (中山ホール) 中・高練習 18:30	23 真小練習の日 Love Thanksgiving Day 全て休み	24 中・高小 16:00-17:30 (中山ホール) 中・高練習 18:30	25 真小の練習 16:00- 中・高小 18:00- 中・高練習 18:30	26	27 5年度以上 指導者 9:00- 12:00 (旅行研修で不 行。臨時練習 【予定しずまり】	28
29 中・高小 16:00-17:30 (中山ホール) 中・高練習 18:30	30					

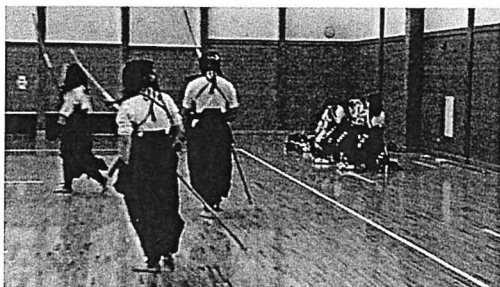
朝、晩お返しできました。皆様のおかげでございようか。
先月は引継ぎ・昇格等委員会開催されました。
新部・新指導者委員会とご事で、自分なぎなたをできる上になっているかの目安になります。
自覚や、自覚につながっていくものなので、積極的な声をお聞かせください。
真中山小学校の皆さん、今月17日自由部が使用できずお休みになります。専業主婦で真小練習したい！！
という方は、18日本曜日の真小練習に参加をお願いします。(18:30-)
今、中学校の授業で全日本からのゲストを使っています。True Tubeの映像を見て仕付け直し、打ち返しを
勉強することができます。一度ご覧ください。QRコードを振り取っていただきます【公式】公益財団法人全
日本なぎなた連盟のTrue Tubeにつながり、仕掛け直し、打ち返しの解説を見ることが出来ます。写真面をご
覧ください。
11月には来年度に向けて小学4年生も参加可能にしたいと思っています。しかし、防具をつけお稽古場できませんので、
各防具を着用できる方の参加をお願いします。

一戸町なぎなた協会 11月練習予定表

(3) 一戸町の事例から見えた課題

①カテゴリーを超えた指導の難しさ

一戸中学校と一戸高校のなぎなた部は、毎日、一戸町武道場「土道館」で部活動を行っているが、練習は別々に行っている。練習時間も異なり、指導者も別で、学校の部活動として尊重されるゆえに、高校の指導者が中学校の練習内容を指示したりすることはない。休日の部活動の地域移行を、平日も視野に入れて検討していくのであれば、クリアしなければならない課題の一つであるといえる。



奥で面をつける中学生と、手前で練習する高校生



奥で練習後のミーティングをする中学生と、手前で練習中のミーティングをする高校生

②指導者の確保

一戸町なぎなた協会の指導者は、一戸町役場職員としてなぎなた業務を専任としているので、平日の放課後時間でも指導できる立場にあるが、企業で働く民間人が放課後の指導を行うことは難しい。特に、なぎなたのように競技人口が少ない競技は、継続的に人材を確保することが困難である。

③選手の確保

一戸町も少子化が進行し、競技者数は表4のように中学3年生の部員数は、ほぼ一桁代で推移している。もともと少数であった中学生選手は、高校入学とともに競技をはなれる選手もいることから、さらに減少する。一環指導体制の利点を、競技人口増加につなげ、選手育成の可能性を広げたい。一方でバーンアウトさせないために、小・中・高といったカテゴリーごとの指導の明確な基準と指導法の共有、指導者間の連携は必須となる。

表4【一戸町の中学校3年生の競技者数】

年 度	中学校3年生の 競技者数	高校進学後も競技を 継続した人数	備考（全国入賞の選手）
平成25年	8	4	選手I・J
平成26年	4	3	選手H
平成27年	7	2	選手K
平成28年	10	6	選手L・M
平成29年	3	2	
平成30年	3	3	選手B
令和元年	10	6	選手A・B・E・O
令和2年	4	2	

5 おわりに

スポーツ庁による運動部活動の地域移行に関する検討会議は、先の10月に実施されたところであり、今後本格的な検討が始まることを考えれば、一戸町のなぎなた指導は、はからずも部活動の地域移行の先を行くものであると感じる。しかし、出発点が一戸町主導である点や町の要請で部が設立されているという点、町からの補助金を受け運営しているという点で、制度的にも、資金的にも大きな困難がなかったということは、地域スポーツを確立するうえで、大変恵まれた状況であり、一戸町の場合は特異なケースであるといえる。大半は独自で設立された競技団体や運動部であるため、それほど容易ではない。

「岩手県における部活動のあり方に関する方針（改訂版）」（令和元年8月）によれば、「学校や地域の実態に応じて、地域のスポーツ団体、総合型地域スポーツクラブ及びスポーツ少年団等との連携、保護者の理解と協力等による、学校と地域が共に子供を育てるという視点に立った、学校と地域が協働・融合した形で地域のスポーツ環境整備を推進する。」と定められている。学校としてもスクール・ミッションの再定義において、地域と連携し、地域を支えるために必要な力を育成するという観点は欠かせない。部員不足の部も多く部活動が成り立たない現状を、地域と連携するというミッションを果たすという意味においても、学校側が地域スポーツに積極的に連携を求めていく姿勢も必要である。

学校が部活動を抱える時代は終わる。現場で指導に携わる我々指導者も、この流れを受けて意識を変えていかなければならない。何よりも一戸町でなぎなたに携わる自分自身が、その先行モデルとしてよりよいあり方を示していけるよう、今後も指導を通して、望ましい部活動のあり方を模索していきたい。